

日刊 動労千葉

80.1.23
No. 331

国鉄千葉動力車労働組合

千葉市要町二一八(動力車会館)
鉄電二二五八一九(公衆電話)三二七二〇七

ほとぼる熱気のうちに成功をかちとった動労千葉「団結旗びらき」(1月12日)には、各界から多くの来賓がかけつけられ心こもった連帯・激励のあいさつをいただいた。『日刊』編集委員会は、限られた紙面上ではあるが、今後何回かにわたって、あいさつ要旨を掲載していくこととします。当日、御あいさつをいただいた各氏は次の通りです。

参議院議員赤桐操氏・県労連事務局長清水光明氏・針生一郎氏・反対同盟より北原鉦治氏・石井武氏・小川源氏・郡司とめ氏・衆議院議員小川国彦氏・浅田光輝氏・顧問弁護士清井礼司氏・全関西実行委中嶋昭八氏・川田泰代氏・古波津英興氏・穴戸良一氏・全金本山支部長谷武志氏・全造船佐伯分会飯野氏。(発言順)

『日刊』編集委員会

80旗びらき あいさつより

前途の困難を想い、
注目していた

80年代への開かれた運動の 先頭に立ち続ける針生一郎氏

(美術評論家)

動労千葉の皆さんが昨年の三月末に動労中央から袂を分かって独自の闘いを始められました。私はその前途に横たわる困難を想像し、また大変関心をもって見守っていたわけでありました。しかし今日の旗びらきで中野書記長の非常に明解な基調報告を聴き、またこの間ずーと送られてきている『日刊動労千葉』を読みまして、動労千葉一四〇〇名の闘いがこんなに力強く発展していることを知り大変心強く感じました。



1.12「旗びらき」での挨拶にたつ針生一郎氏

動労千葉の闘いと思想は 新しい問題を提起した

先ほど御紹介をうけましたが、私が「動労に連帯する会」を辞めたのちも「動力車新聞」が自宅に送られてきています関係上、いつも両者を読み比べているのですが、そこには大別して三つの問題が突き出されているように思えます。

つまり第一の問題は、残念ながら一九六〇年代には総評を中心とする日本の労働組合の運動は組織の動員力という力によって運動をやってきたことにはありましたが、思想的な具体的な面においてはイニシアティブを発揮するところはほとんどできずにきておりました。ところが動労千葉が三里塚反対同盟と協力しながらジェット燃料輸送阻止を闘い続けている、そういう中で80年代前半以来、たえてなかつた、具体的な問題をかかげて思想的にも労働運動・学生運動・住民運動・文化運動その他にまでイニシアティブをとりうる組合集団、労働者集団というものが動労千葉という形ではじめて誕生してきたという点です。

体制と闘うはずの組織が組合民主主義を踏みこじって少数派の意見を圧殺するだけでなく暴力を使ってその組織を破壊しようとする、そういう現状で、今や主観的にはどうあれ客観的には体制の補完物というものになり、体制側からそのおこぼれの分配を要求する圧力集団になり下っていつてしまつた。

そして、その一方で、これに対決し、具体的な闘いを通して、独自の戦闘力を創り上げて現実を闘いぬいている組織。この2つの対比の距離は80年代にむかっています。ますます拡大していつています。このちがいを、この距離というものを更

1980 動労千葉 団結旗開



に拡大し、更に明確にしていかなければならないということです。

同志的な横の組織の 結合が育ちはじめた

第二の問題は、組織動員という場合にナショナルセンターから単産へ、単産から分会・支部へという、動員費を払っての縦の系列による組織化が日本のあらゆる分野を支配している中で、動労千葉はそういうものに安住しないで、16年間も闘いぬいてこられた反対同盟に学んで、これと共闘してジェット燃料を具体的に阻止している。この鮮明な目的と姿勢をもって。ここに私は非常な共鳴をおぼえるものです。組合の上部機関からさえも弾圧を受けながらも、闘う中で、同志的な横の組織の結合が生まれつつあるという点であります。

生き方そのものへの 根本的問いかけ

第三に感じます点は、ジェット燃料輸送阻止闘争というこのことの中には、先ほど中野書記長から言葉を尽して語られたように、繁栄を誇ってきた資本主義の体制というものが、今や、石油問題を中心にガタガタに崩れているとして

(裏へ続く)